

安倍総理のブラジル訪問 —「人」を大切にした訪問—

木下 義貴

はじめに

7月31日から8月2日まで安倍総理がブラジルを訪問された。これは2004年9月の小泉総理以降10年ぶりとなるものであり、ブラジル政府関係者をはじめ、両国の企業関係者、当国の日系社会および私たち大使館や総領事館も心待ちにしていたものである。55年前に安倍総理の祖父である岸信介総理（当時）、また1985年には父である安倍晋太郎外務大臣（当時）がブラジルを訪問しており、3代にわたる今回の訪問については、安倍総理にとっても特別な想いがあったものと思われる。

振り返ってみれば、ブラジル側はアベノミクスで日本再興を成し遂げつつある安倍総理の訪問を大歓迎し、ビジネスを中心に両国の関係が深化している中で、2015年の日本ブラジル外交関係樹立120周年を控え、極めて時宜を得た訪問となり、両国関係の一層の強化に弾みをつける極めて大きな成果があった。詳細は外務省ホームページに詳しく掲載されているのでご覧いただきたいが、以下に安倍総理のブラジル訪問を簡単に紹介する。

日程

安倍総理のブラジル訪問は実質2日間。いろいろな都市を訪問していただきかったが、ブラジリアとサンパウロのみとなった。外務省から安倍総理の訪問に関する話があった際、個人的には、ワールドカップ、BRICS首脳会合等、そしてルセーフ大統領が再選を目指す10月の大統領選を控え（世論調査でルセーフ大統領の支持率が落ち込んでいた）、ブラジル側にとって

は必ずしも最良のタイミングではないかもしれないと不安を抱いたが、これを逃すとまたいつ総理の訪問が実現するか分からないこともあり、どうにか実現させたかった。思ったとおり、ブラジル側からの総理訪問希望日（8月1日）に対する受入れ可否の回答には相当時間がかかった。総理の日程は首脳会談が最優先で決められることから、大使館としても、8月1日の受入れが本当に行われるのかハラハラしていたが、最終的には、日本の希望どおりで受入れが決定された。

ルセーフ大統領との首脳会談や午餐会以外にも多くの行事が入り、分刻みの相当忙しい日程となったが、中身の濃い訪問となった。ブラジリアでは、首脳会談のほか、両国経済界の主要なリーダーで構成される日伯賢人会議のメンバーと両国首脳との意見交換、日系人との懇談、サッカー感謝の集い等、サンパウロにおいては、日系人・日系団体の行事を中心に、医療関係のスピーチ、中南米政策スピーチ等を行った。ブラジリアおよびサンパウロにおける日系人との懇談では、直前に安倍総理から、出席者全員と写真を撮りたいとの意向が示され、ブラジリアでは約200名、サンパウロでは約1,000人以上の参加者全員と写真を撮ったことで、安倍総理の人柄に感激して涙を流す方も出る等、出席者にとっては嬉しいサプライズがあった。

特徴

「地球儀を俯瞰する外交」の下、安倍総理は精力的な外国訪問を続けているが、総理ご自身、首脳会談後の共同記者発表で「ブラジルは地球儀を俯瞰する外交のカギ」と述べる等、今回の訪問ではブラジルとの関係強化に対する強い思いが感じられた。

安倍総理の外国訪問に特徴的なのが多くの経済界の同行である。今回も、約50名もの我が国経済界、政府関係機関、学術関係の長らがブラジルに同行した。これらの方々の交流は、政府間の交流とは異なるダイナミズムがあり、特にブラジル政府が日本に期待している投資、学術振興、人材育成等が具体的に行われる場所でもあり、準備段階で、民間企業の社長等が50名程度同行するとブラジル側関係者に発言すると、一様に驚き喜んでくれた。これらの方々は、ブラジリア



首脳会議での握手

(写真提供：内閣広報室)

においては、個別の関心分野に応じて10名ものブラジルの閣僚との会談を行っているほか、ルセーフ大統領主催の午餐会に招待されており、ブラジル側の日本企業に対する高い評価と強い期待感を感じさせるものであった。なお、午餐会は、約200名もの両国関係者が出席し、食後には多くの参加者が両国首脳と写真を撮る等、和やかな雰囲気の下で行われた。

経済面では民間企業の活動が中心となるものの、政府間では、それを支援するとの観点から、穀物輸送インフラ整備に関する協議をブラジル側と官民で開始しているほか、安倍総理から人材育成の拡充（これまで行われている造船や防災分野に加え、廃棄物処理、医療・保健、自動車部品、インフラ分野等でのブラジルからの研修生受入れ拡充（3年間で約900名））が発表されるとともに、ブラジル政府が推し進めている「国境なき科学」（ブラジルからの留学生10万人送り出し計画）における日本の大学等への受入れ増やインターンシップの拡充等の決意が表明された。国境なき科学については、ブラジル政府高官から、欧米各国を例に引きつつ、ブラジル人留学生に対する日本語教育も含め日本側の受入れにも強い期待が示されていたところであった。

また、安倍総理の外国訪問の特徴として、総理夫人の活躍も忘れるべきではない。昭恵夫人のご意向により、安倍総理とは異なる日程を組まれ、ブラジリアでは公文や日本語モデル学校、サンパウロではサンクルス病院やリベルダーデ地区等を訪問され、多くのブラジル人および日系人との交流を行った。また、「昭恵文庫」として多くの日本の本を寄贈されたことは当国邦字紙でも大きく取り上げられ、当国の日本語教育支援への期待感が示された。

戦略的グローバルパートナーシップ

安倍総理とルセーフ大統領の首脳会談は昨年9月のG20（サンクトペテルブルグ）の機会を利用したものに続き、今回2回目となる。ブラジリアのプラナル

ト宮（大統領官邸）での盛大な歓迎式典に続いて行われた首脳会談でお互いの個人的な信頼関係を強めたことは疑いが無いが、首脳会談の後には、前文および54項目という極めて幅広い分野をカバーする共同声明が発出された。この声明については、その幅広さ故に、我々としてもブラジル政府側との調整に莫大な時間とエネルギーを費やし、発表の直前まで文言の調整が続くこととなり、途中で諦めたいと思ったこともあるが、結果的には、両国の関係の幅広さ・深さと今後の関係強化への両首脳の決意を示す素晴らしい出来になったと確信している。そこでは、両国関係を「戦略的グローバルパートナーシップ」と位置づけることが決定され、二国間関係にとどまらず、国際場裡での問題も協働することとなり、両国の関係がますます幅広く、そして深化することとなる。このため、より頻繁な首脳会談の開催や定期的（毎年）な外相会談の実施についても両首脳で一致したことは大きな成果といえよう。また、この共同声明には、政府系機関および民間企業もあわせ、防災、保健医療、資源エネルギー、学術分野等の9つの覚書等が付属され、官民としてブラジルとの協力関係の強化を目指していることを印象づけることができた。なお、大統領府で実際に交換された文書は9つであるが、総理訪問中に合意された文書は民間企業も含めればかなりの数に上る。この共同声明のほかにも、日本が得意とする海洋資源開発のための造船協力に関する共同声明も発出された。

また、安倍総理からルセーフ大統領には、両国の交流促進に資する取り組みとして、ブラジル人一般旅券所持者に対する短期滞在数次査証の導入を決定した旨が伝えられ、今後、具体的な手続きについて調整を行っていくこととなっている。

更にサンパウロでは、日本・ブラジル・ビジネスフォーラムにおいて、総理が中南米政策スピーチを行った。同スピーチでは、ブラジルの国民的アイドルであったアイルトン・セナや詩人のセシリア・メイレスの言葉に言及しつつ、日本が中南米諸国と「発展、主導力、啓



サッカー行事



総理スピーチ



日系人レセプション

(写真提供：内閣広報室)

発を共に」というメッセージを発出し、ブラジル人や日系社会等から大変高い評価を得た。

今回の訪問により、ブラジルにおける日本の存在感、日本に対するブラジル側の信頼感および親近感が高まったことは、大きな成果の一つであった。当国メディアも総じて今次訪問を好意的に評価しており、こうしたモメンタムを失わないよう、大使館としても両首脳の合意事項を十分にフォローアップしていく必要がある。

日系人政策

両国に特別な信頼関係があるのは、日本人移住者および日系人の活躍のおかげであり、両国は人的な絆で強く結ばれていることは言うまでもない。ルセーフ大統領は、首脳会談で、「ブラジルと日本の関係を世界に無二のユニークな存在としているのは、ブラジルにおける世界最大の日系社会の存在と日本における世界第三のブラジル人コミュニティの存在である。ブラジルの日系社会は、国を形成する重要な一部である。」と述べており、安倍総理も、「多くの日系人が偉大な国ブラジルで様々な分野で貢献していることを誇りに思う。この絆は両国友好関係の象徴であり大切にしたい。」と述べている。このように、ブラジルにおける約160万人もの日系社会の存在は、今日の良い日本ブラジル関係にとって不可欠であることが再認識され、今後とも日系社会に対して積極的に支援することが確認された。具体的には、日本語・日本文化、福祉、スポーツ等の分野で活躍する日系社会青年・シニアボランティアを約100名に大幅増員するほか、若い世代の日本への関心を高めるべく、次世代日系人指導者招聘制度の拡充、日系社会次世代育成研修の100名の倍増、ブラジルにある日系病院に対する支援として、日系社会ボランティアの新たな派遣や日系研修員の日本での研修等の実施等が含まれている。

スポーツ

ブラジルとの関係でホットな話題はスポーツであろう。昨年6月に開催されたコンフェデレーションズカップでは、開幕戦で日本代表とブラジル代表が対戦し、今年6月開催の世界カップでは日本代表も活躍したほか、日本人サポーターのスタジアムでのゴミ拾いについてはブラジルでも大きく報道されている。また、2016年にはリオデジャネイロで、20年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることもあり、お互いの成功に向けての交流の強化が必要とされる。

安倍総理はスポーツを通じた国際貢献策「Sport for Tomorrow」を実施しており、中南米での実施が強く期待される。サンパウロでは、総理は日系社会が基礎を築いた柔道、卓球、野球関係者や子供達と交流し、用具等を寄贈し、参加者は、一様に初めての経験である、生涯の宝である等と口々に喜び、日本との連携を一層強化してこれらの種目を育てていこうとの機運を大いに高める結果となった。

また、ブラジルにおいては、ジーコ氏やドゥンガ氏等のかつて日本のJリーグで活躍したブラジル人監督や選手を前に、日本サッカーへの貢献や二国間関係の発展に寄与したこと等に対する「サッカー感謝の集い」を行った。ジーコ氏やドゥンガ氏等はブラジル国内で今でも大変な人気があり、ワールドカップ期間中は多忙を極めていたため、両氏の参加は総理の訪問直前まで決定せず、担当者の頭を悩ませたが、終わってみれば多くのブラジル人選手・監督が参加し、最後はアルシンド氏の「トモダチならアタリマエ」のかけ声とともに集合写真を撮る等、極めて和やかな雰囲気の下で行われた。また、その直前に、ドゥンガ氏がブラジル代表監督に就任したこともあり、我が国だけではなくブラジルにおいても大きくメディアで報じられた。

おわりに

日本とブラジルの関係では、1908年に最初の日本人移住者がブラジルに到着して以降、100年以上にわたる「人的繋がり」が基礎となっており、今回の安倍総理のブラジル訪問も「人」に焦点が置かれた。人材育成はブラジルの大きな課題でもあり、今回の安倍総理の訪問の成果も人材育成が大きな柱となっていたことから、ブラジル政府を満足させたに違いない。将来の二国間関係を担う若い世代を中心に、人的交流を更に促進していくことは、今後の両国の関係を一層緊密化させ、「発展、主導力、啓発を共に」していくことへの大きな後押しとなる。今回の安倍総理のブラジル訪問を機に、ルセーフ大統領の言う「世界に無二のユニークな二国間関係」が更に拡大・前進していくことを確信している。

(本稿は筆者個人の見解であって、外務省及び在ブラジル日本国大使館の見解を代表するものではありません。)

(きのした よしたか 在ブラジル日本国大使館一等書記官)